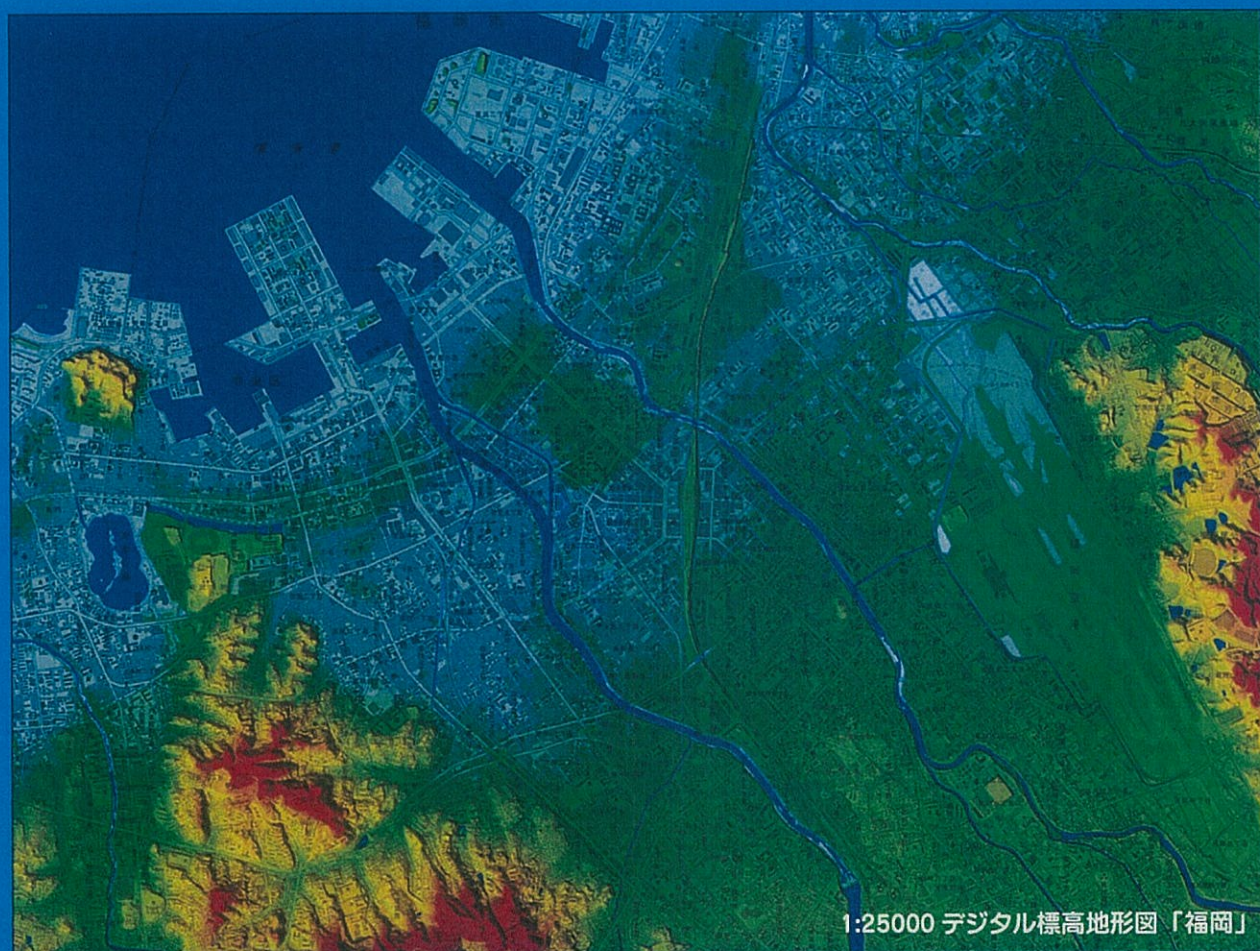


「デジタル標高地形図」は、「数値地図（標高）」や「航空レーザ測量によって整備した標高データ」を用いて作成した陰影段彩図と各縮尺の地図を重ねた地図です。

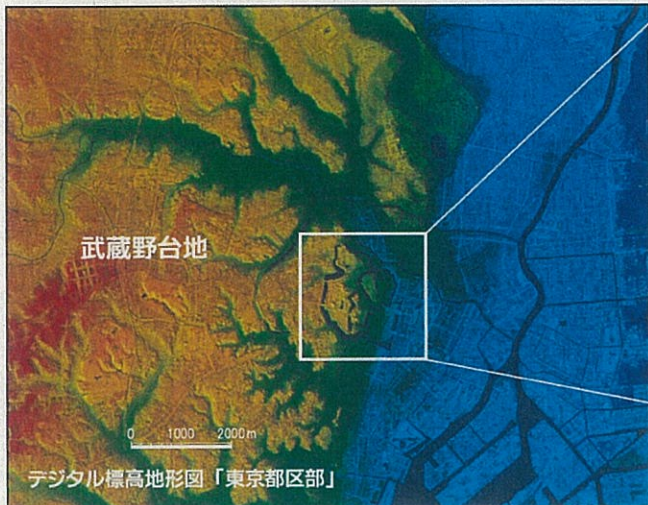
詳細な地形の起伏がカラー表示された上に、地名や道路、学校などの位置が重ねて表示されているので、居住地やその周辺の地形の特徴を直感的に理解することができます。また、洪水や高潮ハザードマップ作成などの基礎資料として活用が期待されます。



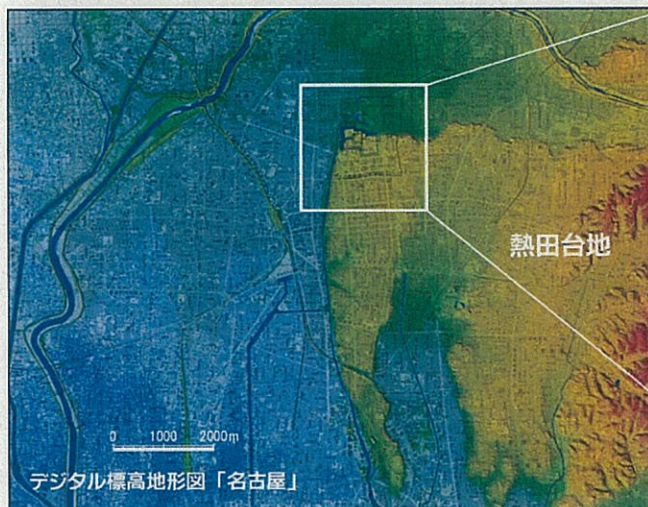
低湿地を臨む台地に立つ城

【江戸城、名古屋城、大坂城】

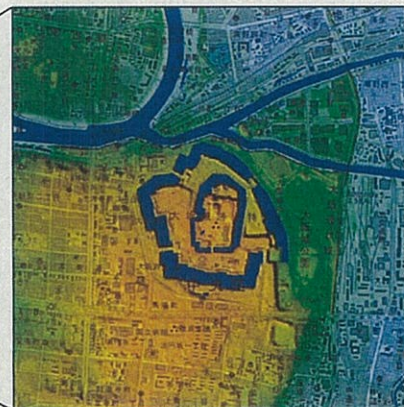
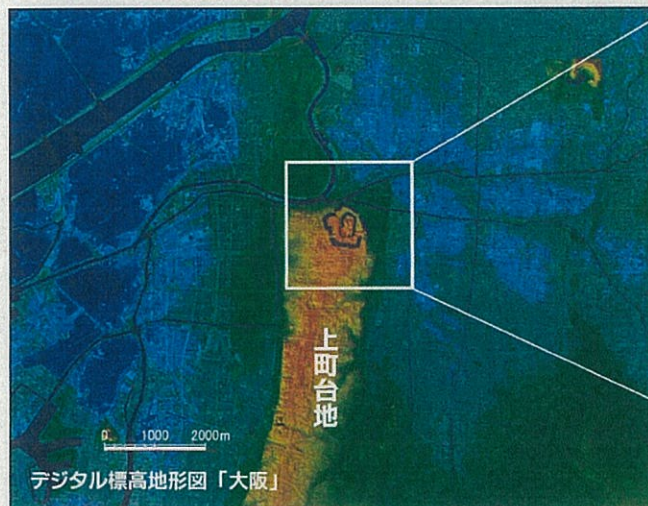
戦国時代の終りから江戸時代のはじめにかけて築城された江戸城、名古屋城、大坂城。デジタル標高地形図を見ると、この三つの城に共通する地形の特徴が見えてきます。これらはいずれも低湿地に臨んだ台地の端に築城されています。周囲の湿地帯が敵の侵入を拒む天然の要害となっていました。また、江戸城、名古屋城は背後に大規模な城下町の建設を可能にする台地が広がっています。



デジタル標高地形図を見ると東京都区部は西側には武蔵野台地の高台が広がり、東側には荒川下流域の標高ゼロメートル地帯の低地が広がっていることがよくわかります。江戸城はこの武蔵野台地の東端にあります。16世紀末に徳川家康が入封したころは、日比谷の入江といわれた海が城下深くまで入っていました。



名古屋城は、熱田台地と呼ばれる台地の北西端に築かれており、北と西を低湿地に囲まれています。北側の矢田川に削られた崖で防備を固めるなど自然の地形を巧みに利用して城の縄張りをしていたことがわかります。



大坂城は低湿地に突きだした形の上町台地の先端、織田信長軍を相手に10年以上も抵抗戦を展開し、難攻不落を誇った石山本願寺の拠点あとに築城されています。かつての淀川本流による北側の崖を天然の要害としています。

起伏の多い東京と平坦な大阪

東京都心を環状につなぐJR山手線に乗ると車窓の景色は、切り通しの中であつたり、盛り土や高架であつたりと変化に富んでいます。一方、大阪環状線には切り通し区間がほとんどありません。デジタル標高地形図で比べてみると、両者の違いがよりはつきりします。東京都区部には台地を刻む幾筋もの谷を見ることができますが、大阪は上町台地周辺を除けばほとんど起伏が見られません。

